



かつて大阪府では、チョウゲンボウは冬鳥で、河川敷や埋立地、農耕地などで出会うちょっと珍しい鳥でした。ところが近頃は、繁殖期に街中で見かけるのも珍しくなくなりました。そこで今回は、チョウゲンボウに注目してみます。テーマは、チョウゲンボウの分布拡大です。

●絶滅危惧種から全国区へ

1970年代、チョウゲンボウは絶滅危惧種でした。1974～1978年の情報に基づく第2回自然環境保全基礎調査では、チョウゲンボウの繁殖確認あるいは繁殖可能性があると考えられたのは、長野県から宮城県までの6県7地点のみ（財団法人日本野鳥の会1980）。当時のチョウゲンボウの営巣場所は、「低山帯の赤土の断崖の穴やヤマセミの巣穴、タカ類、カラス類の古巣、断崖の岩棚などに営巣する」と記述されています。

1980年代に入って、橋梁や建物（倉庫や体育館など）といった人工建造物での営巣が増えて事態は一変します。その萌芽は1960年代から知られていました。

川内（1998a）によると、1966年に神奈川県の大摩川河口でヒナが確認され、1976年には東京都大田区の埋立地の倉庫での繁殖が確認されました。1980年代に入ると、人工建造物でのチョウゲンボウの繁殖が南関東の広い範囲で観察されるようになり、1990年代に入ると繁殖情報はさらに増加しました。

チョウゲンボウの増加は南関東だけのことではなく、1970～1990年代の間に、チョウゲンボウの繁殖分布は、西は石川県、南は神奈川県から、北は北海道にまで拡がりました（川内1998b）。そして、2000年代に入ると、チョウゲンボウの繁殖域は西日本に拡がっていきます。



図1：巣のある穴から顔を出す巣立ち前のヒナ
太子町 2015.5.25（浅野宏幸）

●大阪のチョウゲンボウ

大阪府で最初にチョウゲンボウの繁殖が確認されたのは2010年のことです。鶴見緑地（大阪市鶴見区）や淀川など数ヶ所、いずれも人工建造物での営巣でした。ただ、2000年に吹田市の万博公園で、2006年には高石市の臨海部で、繁殖期に営巣場所とおぼしき場所への出入りが観察されていたので、もう少し以前から、大阪府でチョウゲンボウは繁殖していたようです。

その後、大阪府でのチョウゲンボウの繁殖はさらに拡がり、河川敷や大きな都市公園で繁殖期にチョウゲンボウを見かけることは、珍しくなくなりました。

●チョウゲンボウの何が変わったのか？

人工建造物で営巣するようになったチョウゲンボウは、崖地で営巣してた頃と何が変わったのでしょうか？

池田ほか（1991）は、崖地と人工建造物を含む関東地方のチョウゲンボウの営巣地26ヶ所を比較した結果、崖地でも人工建造物でも、チョウゲンボウが営巣地に選んだ場所は似ていることを見だしています。つまり、ほぼ垂直な10m以上の高さで見晴らしがよく、入口が狭い横向きの空間で、周囲に開けた環境がある。

どうやら、チョウゲンボウの巣場所の好みが変わったのではなく、人工建造物の中に好みに合った場所を見いだしただけのようです。そして、それがチョウゲンボウの都市への進出、そして全国展開を可能にしました。

●野外で実際に観察してみよう

チョウゲンボウの営巣に適した人工建造物は、以前から日本各地にたくさんあったのに、人工建造物での営巣の流行は、1980年代にはじまりました。そのきっかけは何だったのでしょうか？人工建造物での営巣を始めたからといって、どうして分布域が拡大したのでしょうか？チョウゲンボウにはたくさんの謎が残っています。

この謎を考えるには、今まさに分布を拡大している場所での観察が有効だと思います。今、西日本に絶好の機会が訪れているんじゃないでしょうか？

●引用文献

- 池田昌枝・本村健・石井良明・内藤典子・藤田剛（1991）南関東都市部におけるチョウゲンボウの繁殖状況。Strix 10：149-159。
川内博（1998a）首都圏におけるチョウゲンボウの繁殖分布の変遷について その1。Urban Birds 15(2)：43-51。
川内博（1998b）日本におけるチョウゲンボウFalco tinnunculusの生息分布の変化について。1998年度日本鳥学会講演要旨集：75。
財団法人日本野鳥の会（1980）鳥類繁殖地図調査1978。財団法人日本野鳥の会、東京。

和田 岳（わだ たけし）：本会幹事、大阪市立自然史博物館学芸員。HP「和田の鳥小屋」
<http://www.mus-nh.city.osaka.jp/wada/wada-index.html>